

## ニイラゴンゴ火山の2002年1月17日噴火に関する緊急調査（序報）

## Preliminary report on emergency survey of Nyiragongo eruption on January 17,2002

# 浜口 博之[1], ミフンツ ワフラ[2], マヒンダ カセレカ[2], ムビリジ アクンビ[2]

# Hiroyuki Hamaguchi[1], Mifundu Wafula[2], Mahinda Kasereka[2], Mbiliji Akumbi[2]

[1] 東北大・理・地震噴火予知センター, [2] コンゴ自然科学研究所

[1] Res. Centr. Pred. Earthq. Volc. Erupt., Grad. Sch. Sci., Tohoku Univ., [2] C.R.S.N., R.D.Congo

コンゴ共和国の東部に位置するニイラゴンゴ火山（標高 3470m）は、2002 年 1 月 17 日に大噴火した。前回の噴火（1977 年 1 月 10 日）から 5 年間静穏な状態が続いた後、1984 年 6 月 22 日にニイラゴンゴの火口で噴火が始まり新しい溶岩湖が出現した。その後、20 年間に渡り溶岩湖の水位は間欠的に上昇し、噴火直前までに溶岩湖の水位は約 500m 上昇した。2002 年の噴火では、溶岩湖に蓄積された溶岩が山腹や山麓の開口性割れ目を通して短時間に流出した。噴火後には、山頂火口は深さ約 800m の V 字型の火口に変容した。割れ目から流出した溶岩流の全長は約 20km に達し、その一部は人口 40～45 万人を擁するゴマ市の市街地や空港を直撃し厚さ 2～3m の溶岩流で覆った。しかし、市街地及びその周辺は地形傾斜が緩いため溶岩流の速度は遅く、噴火による死者の数は約 50 名と少なかった。溶岩流に覆われたゴマ市街地の面積は 4.5 平方 km、被災人口は 10 万人と推定され大災害の様相を呈している。国際赤十字、国連機関や NGO の努力により各種の災害救援活動が活発に行われているが十分とは言えないところが散見される。本報告では、溶岩湖活動の変遷、噴火予知、割れ目や溶岩流の分布、ゴマ市街地の災害の様子等に関する緊急調査結果について述べる予定である。